

教員から体育大生へのメッセージ



スポーツ生命科学系
堀内 雅弘 教授

研究キーワード

座位行動 低酸素環境
虚血プレコンディショニング
骨格筋代謝 血管機能
近赤外線分光法 脳循環

「年の功」より「出藍の誉れ」

運動生理学を担当している堀内雅弘です。運動生理学研究者の中には、研究と実践との関係が逆になってしまうケースがあります。振り返ると、私もこの10数年はそうであったと思う時があります。つまり、研究を一つの成果(論文)にするために、「運動生理学」という学問を礎に既往の研究報告等から、体育・スポーツ・運動のメカニズムを考えるアプローチです。そもそも、現存するスポーツや体育から、何らかの疑問を持ち、問題点を見つけ出し、それをどのように捉え、未知のことを明らかにしていくというのが研究の始まりではないかと改めて思うことがあります。アップル社創業者である故スティーブ・ジョブズ氏の有名なメッセージの最後に“Stay hungry, stay foolish”というものがあります。直訳すれば、「ハングリーであれ、愚かであれ」かもしれませんが、学生のみなさんに置き換えることができる深く広い意味に解釈できます。「心の底から好きなことを見つけるまで渴望し、常識にとらわれずチャレンジし続けなさい」と私は思います。

「年の功」とは年長者の知恵や技能を良く評価する言葉ですが、「保身や安定のために、様々なことにチャレンジできなくなってしまう」ということにもつながるのです。若い人の渴望した意欲や行動が、先人たちに刺激を与え、先人が蓄積してきた叡智が、若い人のさらなる意欲や行動につながり、お互い刺激し合い、「出藍の誉れ」となる、そんな学生生活を皆さんが送れるようなことを願っています。

「“どうせ無理。”」

「自信を無くしてしまった人は、“どうせ無理”と言って、他の人の自信を奪ってしまうことがある。」

これは、TEDという講演会での植松努さんの言葉です。この講演会の内容は、私がここで説明するより、皆さんが実際に動画を見た方が良いと思います。(※右記参考)きっと、皆さんを励ましてくれるはずです。大人になるほど、私たちは「どうせ無理」が身近になってくるようです。もちろん大変困難なことは存在しますし、様々な経験を重ねることでその困難の実体が具体的にわかってきます。そして、その「どうせ無理」を正当化することで自分を安心させ、その安心を他の人にも分配しようとして、その「無理」を誰かが実現させてしまわないように、誰もが、自信を失うのは怖いものです。しかし、その「無理」に挑戦する行為が希望となり、そしてその達成が私たちに本当の自信や安心を与えてくれると私は信じています。

「我々の生きる道は天によって完璧に決められていて、それが故に、完全に自由だ。」

これは、井上雄彦さんのバガボンドという漫画に出てくる言葉です。私は、この矛盾の示す意味がわかった時、思わず微笑んでしまいました。

無理かどうかを決めるのは、最後はいつでも自分自身です。もちろん、そのためには正確な努力を積み重ねる必要があります。ただし、それが無理かどうかを、「天」が既に知っているのであれば、安心してその「無理」に挑戦すれば良いんだと私は思います。挑戦する学生の皆さんのことを、私も応援しています。

※参考動画
二次元コード(約20分)
-植松努-思うは招く

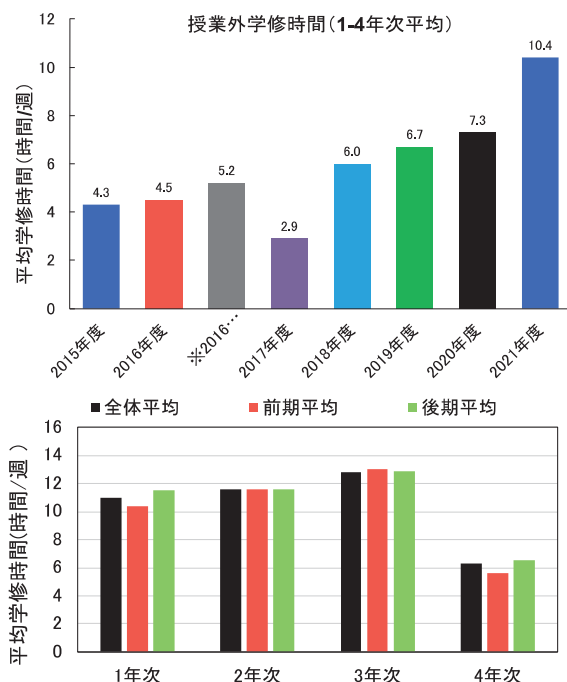


スポーツ・武道実践科学系
成田 健造 講師

研究キーワード

水泳 コーチング
流体力学

体大生の学びの現状と変化



授業外学修時間の変化:左図は2015年度から2021年度までの、1週間あたりの授業時間外での学修時間を示しています。昨年度は、はじめて10時間を超えました。

コロナ禍において、オンライン授業をより充実させることや、筆記試験の代わりにレポート課題が課されるようになったことが影響していると分析しています。オンライン授業の有無に関わらず、今後もレポート課題等でより深い学びが促進され、その結果として授業時間外での学修が充実することが期待されます。

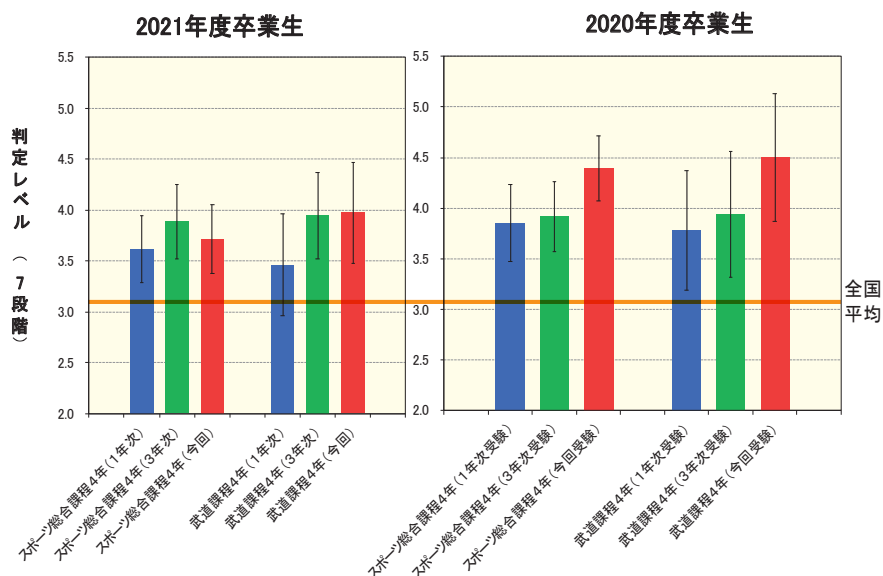
その下の図は、学年毎のものを示しています。残念なことに、4年次の授業時間外の学修時間が6時間ほどで、他の学年より低いことです。この傾向は、本調査をはじめた当初から続いている傾向です。このような背景には、授業外学修時間の捉え方が学生に十分理解されていないことがあると考えています。授業時間外の学修時間の内訳として、「卒業研究に関わる調査や資料作成」「就職に関わる学修」「授業に関わらない読書や資料収集」なども含まれます。その点を加味すれば、4年次の学修時間は他の学年よりもっと多くなると考えます。

在学生は、今後の「授業外学修時間の調査」時に、この点も考慮に入れてご回答ください。

4年次の汎用的能力の伸びの変化:

右図は、2021年度と2020年度卒業生のPROGテスト(汎用的能力)におけるコンピテンシー(課題解決をするための行動力)の学年進行による推移を示したものです。例年4年次では、卒業研究を通して大きく伸長する傾向(2020年度)を示していましたが、2021年度卒業生は3年次からの伸長がそれほどありませんでした。

コロナ禍の中で、思うような実験や調査など卒業研究への取り組みができなかったのかもしれませんが、この背景についてはさらに分析しますが、コロナ禍の中でも卒業研究を通じ、本学の学生の強みである「課題解決をするための行動力」の伸長の流れを絶やさないようにしていきましょう!



はじめまして

8月から教育企画・評価室の配属になりました事務補佐員の玉山由佳と申します。岩手県花巻市の出身です。趣味と健康のため、NIFSスポーツクラブのシニア陸上チームで週2回練習をしています。憧れの鹿屋体育大学で働くことができ感謝の気持ちでいっぱいです。

皆さまの充実した学生生活・競技生活のサポートに繋がるよう、室長の金高先生と教務課の皆さまのご指導のもと笑顔で頑張ります。どうぞよろしくお願いいたします。



<発行>

鹿屋体育大学 教育企画・評価室

〒891-2393 鹿児島県鹿屋市白水町1番地
大学院棟1階

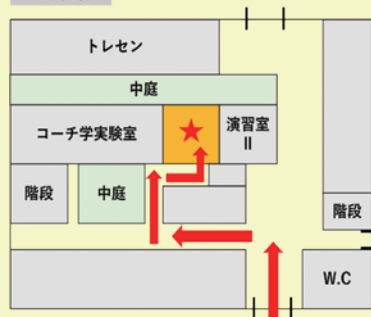
TEL&FAX: 0994-46-5082

E-MAIL: kyomur-ap@nifs-k.ac.jp

<企画・編集>

大澤啓亮・玉山由佳・金高宏文

大学院棟



教育企画・評価室のHPもご覧ください



<https://www.nifs-k.ac.jp/faculties/quality-assurance/pe/>